

令和 6 年度島根県立大学学生研究奨励事業研究結果概要書

盆子原実美佳

1. 研究テーマ

学生が栽培した野菜の直売所の運用可能性に関する探求

2. 研究の目的

本研究では、1. 寮に住む 1 年生及び寮経験者への寮近辺での野菜の無人販売に関する需要調査と、2. 近隣農地での野菜の栽培に関する費用の推計を実際に野菜栽培を行うことで定量化し、3. 寮周辺での農地活用の可能性を経済性の観点から評価することで、学生が栽培した野菜の寮生に対する販売について経済的な側面からの実現可能性を検証することを目的とする。また、仮に寮生が購入しても良いと考える金額が、栽培に必要な費用を上回るのであれば、農業を体験したい学生にとって、休耕地を活用するインセンティブを提示でき、2023 年にオーガニックビレッジ宣言をしている浜田市において、島根県立大学の学生が有機栽培に取り組むことによる貢献につながる可能性も検討できる。

3. 分析方法

3-1. WTP

島根県立大学浜田キャンパスの学生を対象に野菜に対する支払い意志額(Willingness to Pay: 以下 WTP)をアンケート調査した。また 3 つのシナリオ（慣行栽培の白菜・無農薬栽培の白菜・無人販売所の白菜）を提示し、統計的に分析した。

3-2. コストの推計

大学付近で借りている畑で実際に野菜を育て、収量やコスト、人件費なども推計する。

3-3. 経済性評価

3-1 と 3-2 で得られた値を比較することで、学生が大学近辺で野菜を栽培して寮生に販売することが経済性を満たすのか検証する。

4. 研究結果

島根県立大学浜田キャンパスの学生 115 名を対象としたウェブ調査では、無農薬野菜への需要が慣行栽培よりも高いことが分かり、統計的にも有意差を示した。また、無人販売所が仮に大学に設置された場合、対象者の過半数以上が購買意欲があるということが分かり、特に「便利だから」という利便性が購買意欲を高めていることが分かった。一方で、品質や保存に不安を感じるといった回答も得られた。白菜の栽培に関しては、収穫量が合計で 44.74 kg、コストは 11,715 円であり、収穫量次第で経済性があると考えられる。本研究により、大学周辺での野菜栽培と無人販売の設置は、需要と経済性の両面で運営可能性があると考えられる。特に、無農薬栽培の取り組みは、浜田市が掲げるオーガニックビレッジ宣言に貢献し、地域農業の活性化にも寄与する可能性がある。